【質疑応答】

小松 玉川大学の小松です。今年のシンポジウムの企画に関しては、上田代表と相談をし、2 月頃に誰にしようかという話になった。そして、3月にジョン・モーガン氏が会長をしている ASCL の大会に出た。そこで、ASCL の事務局長をしているジョン・ダンフォードさんに誰か紹 介してもらえないかという話をし、ちょうど会長になられたジョン・モーガン氏を推薦していた だいた。私が ASCL にお願いした理由は主に2つある。日英では、長い間研究者の方をゲストと して招き、イギリスの教育の研究について話を伺ってきた。しかし、私のようなイギリスの教育 改革の最新の動向を追いかけている者からすると、学校の実態が見えない。考えてみると、私 たちのような大学の教師をしている者は、日本の小・中・髙校がどうなっているか知らないこと が多い。というのは、特に日本の場合大学の先生は学校に勤めたことがないことが多い。そこで、 学校現場のことに大変詳しく、先生たちの考えをご存じの方を日本にお招きするのがよいので はないかと考えた。イギリスで校長会は2つある。セカンダリーの先生たちから成る ASCL とプ ライマリーの先生方の集まりである NAHT(National Association of Head Teachers) である。NAHT は、毎年5月の上旬に開かれている。ASCLの方は、3月の上旬から中旬にかけて開かれる。私 は、昨年と今年、この2つの組織の年次大会に参加した。特に今年は、選挙が近いということで、 ASCL では、3つの主要政党の担当者が実際に来て話をすると同時に、メンバーとのディスカッ ションが行われた。ということで、2つめの理由であるが、政権交代が行われ、さらに考え方の 違う政党が一緒になって政権を担うという珍しい状況になっている。これが学校の現場にいる人 から見るとどのように見えるのかということで、政権交代前後の教育政策の変化についてお話を いただくことになった。また、モーガンさんは長い間セカンダリーの校長をされており、奥さん のスーザンさんもセカンダリーの先生であるので、セカンダリーの話についてもご質問いただく ことができる。それから、大学入試に関わる組織にもセカンダリースクールの代表として入られ ているので、もし大学進学や職業教育に関することについても興味があればご質問いただければ と思っている。まず、舘林さんにモーガンさんのプレゼンテーションの内容を簡単に要約してい ただいて、その後、谷川さんと舘林さんからコメントや2人の関心に基づいた質問をお願いしよ うと思っている。それに対してモーガンさんにお答えいただいた後、今度は皆さんからのご意見 やご質問をお願いしたい。

舘林 監査法人トーマツの舘林です。モーガンさんの話を要約すると、トニー・ブレアが言った「教育、教育、教育」から「自由、公平、責任」へとフレーズが大きく変わったということである。話は2つに分かれていて、1つめはモーガンさんが代表を務めている ASCL の機能やメンバーのことである。それから2つめが新政権になってどのようになっていくのかということについて報告をいただいた。簡単に説明すると、ASCL は 15000 人から成り、他の教員組織と比べると一番メンバーが増えている。その要因として、学校の財務を担当するビジネスマネージャーがメンバーになっているからということがあげられる。メンバーに対するサポートとしては、地域ごとのサポート、法的なことに関するサポート、様々な情報の提供などを行っている。また、政策決定を行う人たちへの影響力を持った組織である。

小松 今の点に関して補足をすると、ASCL (以前は SHA) のメンバーになると、定期的にニューズレターが来ると共に、テーマごとの出版物が無料で送られてくる。また、顧問弁護士がおり、校長はトラブルが起こった時などに相談できる。また、退職直前の校長などは年金などついても相談できる。このように、管理職組合として機能している。経験から言うと、年次大会には大臣が来て講演をする。2泊3日の日程でホテルで行われ、そこに出るとその時々の政策の問題について話を伺うことができる。興味がある方はどうぞ。

舘林 また、労働党が13年の間に何をしたかというと、学校と病院に対する巨額の投資、国レ ベルの最低賃金の設定、多くの雇用の創出、マイノリティや社会的に恵まれない人たちに対する 救済のしくみの整備などである。また、労働党政権の教育に関してうまくいった点として、学校 の ICT に関する投資、学校評価に関してより自己評価に特化したシステムの整備、生徒の学習に 関する到達レベルの厳格化、学校で働く教員以外の職、たとえば、補助教員やビジネスマネージ ャーなどの職の配置、学校間で教育の質を向上させるための仕組み作りなどをあげていた。それ から、新しい連立政権に関して特徴的なことは、教員の資格などに関する外郭団体が消滅してい ったということである。また、学校の建物の再建築に関するプログラムも中断してしまっている。 また、特徴的なこととしてアカデミーの拡大がある。新しいアカデミーが9月から開校する。し かし、実際今までとどこが異なるのかに関してはまだ明らかになっていない。またこれとは別に 新しくフリースクールというものが言われていて、これは保護者の希望によって設立が可能な学 校である。これは保護者が経営に関わるということではなく、保護者の希望によって作られるも のであり、利益を目標としたものではない。スウェーデンやニューヨークで行われていることを イギリスでもやってはどうかということで新政権はこれを導入するようである。ただ、スウェー デンの中でも大きな議論があるものをなぜイギリスに導入するのかについて大きな疑問もあるよ うである。また、新政権の「自由、公平、賢任」に関して、新しい自由は歓迎するが、それは公 平さと責任を伴うものであるということと、1つの学校が自由を持つことで他の学校にダメージ を与えてはいけないということ、つまり地域全体がよくならなければならないということをおっ しゃっていた。最後に、構造的な改革ということではなく、むしろ教員の教えることと生徒の学 習内容の水準を上げていくことが重要だとおっしゃっていた。

小松 では、次に谷川さんにコメントをお願いする。

谷川 今日のコメントは、小堀さんの本からインスピレーションを得ている。小堀さんの分析によると、サッチャーの時代とプレアの時代を比較した場合、サッチャー時代の国家を一言で表すとレッセフェールである。市場化を行い、競争原理を働かせることが目的である。学校は競争を行うプラックボックスになっている。その結果、アウトカムが出てくるわけであるが、レッセフェールであるので、どのようなアウトカムが出てくるのかについてはさほど大きな関心が集まらない。したがって、格差の問題や貧困の問題がクローズアップされたというのが小堀さんの分析である。それに対して、プレアの国家像は、Regulatory State である。同様に、まずターゲットが設定される。ナショナルターゲット、ローカルターゲット、スクールターゲット、パーソナルターゲットと厳格にターゲットが設定される。そして、サッチャー時代と同じように、市場化を行い、競争をするわけであるが、それは手段にすぎない。学校のアウトカムはよいものでな

ければならない。それが目的であるので、それを達成するために Ofsted が学校に厳しく対応す る。さらに、numeracy hours や literacy hours のような細かな規制が学校にかかる。このよう に、行政からの規制によってよい結果を得る。そして、国際的な競争にも対応できるようにする。 また、貧困の問題も念頭においている。以上のような形で説明されている。ブレアの一般的な政 策の特徴の 1 つは joined-up government である。これは、教育の分野では、Educational Action Zone や Every Child Matters、医療の分野では Health Action Zone などが取り組まれてきた。そ して、このような取り組みの中では、コミュニティが大きな役割を与えられてきた。すなわち、 Regulatory State という考え方に加えて Community-centered policies がしっかりと機能している のがブレアの政策の特徴である。ブレアはコミュニタリアンであるということが盛んに言われ続 けてきた。以上のことを前提に、本日の私の質問に移りたい。まず、モーガンさんのスピーチの 中では教員の自律性や自由ということが強調されていた。しかし、Regulatory State の考え方は このような教員の自律性や自由を信頼しないところから生まれているのではないか。より厳密に 言えば、教員の自律性や自由だけで教育はよくなるのかという問題から出発しているのではない か。次に、今日おもしろく聞いたのが、学校は本当に行政(中央政府、地方政府)からの通達や 助言を拒否できるのか。日本の場合、指導主事が学校に入るのを拒否できる学校はない。次は、 Regulatory State と Community-centered policies との関係についてである。小堀さんが言うには、 Regulatory State と Community-centered policies の考え方は対立する。そこで、お話を伺ってい てすごく関心を持ったのが、national framework, local flexibility というフレーズである。このフ レーズの実態、現実をもう少し教えていただきたい。最後に、Every Child Matters は今後どうな るのか。

モーガン Regulatory State の考え方は、教員に対する不信から生まれたものではない。15年 前、Ofsted や National Strategies はとてもよいものと考えられていた。というのも、当時の教 育制度はあまり効果的なものではなく、教員の教え方の質に一貫性がなかったからである。他 方、Ofsted は学校のトップにとって大きなプレッシャーになることや国の側からの1つの基準 で、また、「優れている」、「よい」などの一言で評価されるという問題点もあった。Ofsted が導 入されたことのメリットは、現場の教員が1つの基準を与えられることによって、それに沿うよ うに一貫性を持って教えられるようになったことである。15 年前までは、学校が様々な視点か ら評価されることはほとんどなく、単にテストの点のみで評価されていた。しかし、現在では教 員の教え方の質も向上し、ほとんどの学校がエビデンスに基づいた自己評価を行っている。今で も中央政府が提示する national framework はあるが、以前ほどの規制ではない。なので、先ほ どのスピーチの中でも申し上げたように、政府が各学校の改善に積極的に関わるのではなく、学 校間での協力によって学校改善を行うべきである。1つの成功している学校のリーダーが、うま くいっていない学校に方法などを伝えることによって、うまくいっていない学校も成功できるよ うになるという方法も使っている。Regulatory State の考え方は教員を信用していないのではな いかという質問に対する答えであるが、私はそうは思わない。病院を例に考えてみよう。政府が どこに病院を建設するか決定することは、歓迎する。しかし、政府が私の医者に対して私をどの ように治療するかについて干渉すれば、私は喜ばないであろう。教員についても同様のことが言

えて、中央政府や地方政府が学校教育を整備してくれるのはとてもうれしい。しかし、政治家や 政府が私たちに教師がどのように教えるのかを指示するはうれしくない。人々に対して、どの専 門職を一番信頼でき、どの専門職が一番信用できないかを尋ねた最近の調査では、医者を抜い て第一位が校長であった。一番信用されていないのは政治家であった。では、次の質問に移りた い。national framework, local flexibilityのlocal という言葉で私が意味しているのは、自分の学 校であるとか、学校間のパートナーシップであり、national framework とは、どのようなものを 教えるかなど緩い規制を意味している。local に関して、イギリスの学校では、よく知られてい るように校長が学校のお金の使途を決定できる。たとえば、10名の教員を解雇し、20名のティ ーチングアシスタントを雇うことができる。それに対してティーチャーユニオンが反発したとし ても、エビデンスを提示することで説得することができる。学校はそれぞれに異なるニーズを持 っている。うまくいっていない学校では、多くのシニアマネージャーを必要とするが、うまくい っている学校では、シニアマネージャーを少なくして、ミドルマネージャーに権限を委譲してい る。生徒も異なるニーズを持っている。豊かな地域と恵まれない地域とでは生徒に対する教え方 も異なる。つまり、おおまかな national framework を踏まえたうえで、local なニーズに基づい て教育を行うということである。次に、Every Child Matters の将来についてである。新政権にな って、Department for Children, Schools and Families(DCSF) が Department for Education に変わ ったのは何かを示唆しているように思う。しかしながら、旧政権と新政権の優先事項は共涌して いて、「ギャップを埋めること」すなわち、恵まれない子どもと恵まれた子のギャップと埋める ことであると私は考えている。勉強ができない子どもたちは、単に能力の問題だけではなく、両 親が教育において成功することの意味をあまり理解していなかったり、社会的に恵まれない環境 にいるために勉強できる部屋がなかったり、メンタルヘルスの面で問題がある子どもが多かった りする。このことが、最近イングランドにおいて問題になっている。このような問題に対応する ために、学校では、教員だけではなく、カウンセラーを常設したり、子どもたちの面倒を見る人 物を置いたりしている。私が教員になったころは、教員がパストラルケアも担当していたが、現 在はそのような様々なスタッフを置いて、子どものニーズに応えられるようにしている。DCSF が Department for Education に変わったことが示唆することは、学習に一番の重点を起きながら も、このような子どもたちの幅広いニーズにも配慮するということであると思う。政権が変わ っても、優先事項は共通していて、ギャップを埋めること、すべての子どもの到達度を向上させ ること、教え方や学習の質を向上させることである。TIMSS や PISA でトップをとるような国に 共通しているのは、教員の質が髙いということである。フィンランドでは修士を終えた学生の約 10%が教員になっている。新しい教育大臣のゴーブ氏は、この政策を参考にし、優秀な学生が 教員になることを奨励したいと言っている。

小松 では、次に舘林さんからどうぞ。

舘林 私は 1995 年から 2002 年までイギリスにいて、トニー・ブレアが出てきて国全体が沸き立った時を経験している。ブレアが ICT を学校に導入した時、様々なキャンペーンを行った。たとえば、テスコで買い物をすると、トークンのようなものがあってそれを学校に持って行くと学校の器具が買える。なので、当時社会が変わってきているということを実感した。しかしながら、

私は、学校の質を高めることは大切であるけれども、産業界を活性化するために学校が使われているのではないかという印象を持った。ICT が学校に導入されると学習方法も変わってくるので、子どもたちが興味を持つようになった。そのような動きとともに、アシスタントスタッフやビジネスマネージャーが導入されるなど、教員の役割が変化してきていてより細分化してきているように思う。しかし、役割を厳密に分担できない部分もあるし、子どもたちを総合的に見ることができなくなるという面もあるのではないか。なので、1つめの質問は、役割の細分化は本当に可能であり、効率的なのかということである。それから、教員に求められている知識とスキルについてご意見を伺いたいというのが、2つめである。それから、3つめが外部の企業が学校に関わることについてであるが、実際に企業がお金を出して学校を建設するなど実際にお金を出すという点が1つ、2つめが子どもたちが企業に行って労働体験をするなどの面である。それから、保護者の面から見た時に、学校選択など保護者に選択をする権利がある。前政権も現在の政権もギャップを埋めると言いつつも、選択権を与えることでますますギャップが開いていくのではないかという心配がある。なぜかというと、保護者間で学校を選択するための知識や意欲に差があるからであり、そこに危険性があるのではないか。

モーガン 役割が細分化されていることについての質問であるが、これはよいことであると考え ている。以前はカウンセラーなどを LA から派遣してもらっていたが、現在は学校が雇用している。 1人1人の子どもを全面的に理解してくれる人が必要であると私も思う。その役割を担うのがパ ーソナルチューターである。教員がパーソナルチューターの役割を果たす。過去には、教員は自 らを教科を教える者であって、子どもの先生ではないとみなしていた。保守党政権には、教員は 教科の知識を教える者と考えるのではなく、すべての子どもの全人格的な発達という面を忘れな いでもらいたいと思っている。私は、印象的な教員は、子どものニーズに応じて子どもを動機づけ、 成功をもたらす教員であると信じている。すべての教員が、能力のある子どもだけでなく、学習 障害の子どもも教えることができるべきである。過去5年で、教員の教えること以外の業務が制 限されてきている。教員は、授業の準備をする時間を保証されている。また、教員は休んだ同僚 の分の仕事を肩代わりしたり、壁の飾り付けをしたりする必要はなく、これらはティーチングア シスタントの仕事である。しかし、これらの教員の労働条件の向上が生徒の学力を向上させたと いう研究は存在していない。次は、企業の関わりについての話である。ご指摘のように、テスコ による取り組みは、テスコに一番利益をもたらした。ECM の中には、1人1人の子どもにビジ ネススキルをつけるというものがある。なので、たとえば私の学校では、6週間に1度、全学年 合同でビジネスに関するシュミレーションをしている。また、他のグループは、フットボールス タジアムに行き、フットボールスタジアムの運営方法を学んでいる。現代の重要な関心事として、 環境問題やフェアトレードの問題がある。子どもたちは、それらのことに関してリーダーの役割 を果たすことができる。たとえば、自分たちが購入する食べ物がフェアトレードを通じたものか どうかを確認したり、両親に車で通勤するのを控えるように言ったりできる。次に、保護者の観 点や学校の選択に関する質問に移るが、「選択」というのは誤解を招く言葉であると思う。「好み」 という言葉が適切ではないかと思う。私の学校は、とても人気がある学校である。もし私の町の 保護者や子どもに尋ねれば、半数が私の学校に来たいと答えるであろう。しかし、それに応えよ

うと思えば、12000 人を引き受けなければならないが、私の学校が引き受けられる人数は 1200 人である。政治家は、保護者に選択権を与えているという幻想を抱かせる。現実には、保護者は 地元の学校がベストをつくしているということを知りたいだけである。

小松 では、残り30分ありますので、皆様方から質問をどうぞ。

森川 緊縮財政だからこそ、新しいタイプの学校を作ることはやめるのではないか。それよりも、 イングランドでは、フォーマティブアセスメントを導入する学校が増えてきていて、それによっ てスタンダードを上げるということが行われているかと思う。

モーガン 前政権の時代から Assessment for Learning という言葉が使われていて、これが今後 も継続されるかどうかはまだわからない。ただ、ここで重要なことは、子どもの学習を教員が本 当に理解しているのかということである。子どもが何がわかっていて、何ができるようになった のかを教員が把握していることが重要で、それによって、教員は授業を組み立てたり、何を教えるのかを決定したりできる。Ofsted が評価を行う時には、よい授業が行われているのかという 点が重要であって、教員が教えていることを子どもがしっかり理解していること、子どもが教えられたことをできているということを Ofsted も重点的に評価している。

森川 そうすると、Ofsted は Assessment for Learning をしっかり見て評価をしているということなのか。

モーガン Ofsted が Assessment for Learning を見る時には、教員が教えていることと子どもが 学んでいることとの相互作用によって授業が行われているかということを見ている。 Ofsted の 査察官は、教員に尋ねるよりも、子どもたちに「君は何を学んでいるのか」、「次は何をすればよ いのか」などについて尋ねることによって、教員が教えたことが生徒に伝わっているのかという ことを見ている。

宮島 西武文理大学の宮島です。今までお話しされてきた内容やプレゼンテーターの先生方のお話には、1つ視点が欠けているのではないか。それは、子どもそのものである。サッチャー時代の子ども、プレア時代の子ども、今現在の子どもについて何か質的な変化があれば教えていただきたい。というのも、日本でも10年少し前からゆとり教育が導入され、日本の子どもの質がかなり変わってきたように思う。政策が国民の質に影響を与える実例になってしまったという気がしている。そこで、イギリスでは頻繁に変わる政策が子どもたちにどのような影響を与えているのかを質問したい。

モーガン まず、子どもを学習者という視点から見ていきたい。ブレア政権時代には、子どもをいかに学習に関わらせていくのかという点が重点的に取り組まれた。たとえば、授業の組み立ては、10分間教員が話をし、10分間子ども同士で話をさせ、そして10分間子どもに発表させ、教員がまとめ、子どもが作業をするという流れである。次に、子どもを1人の人間として考えてみたい。時代によってどのような若者が主流になるのかは変化する。たとえば、60年代の社会問題により積極的に関わっていこうとした若者と比べると、80年代の若者は、より自己中心的であると思った。2010年の時点で、子どもたちを私の視点から見てみると、子どもたちは世界的な環境問題やコミュニティの問題に関してより配慮し、関わっていこうとしていると思う。私が今一番心配していることは以下のことである。この13年間、国レベル、学校レベル、個人

レベルにおいてターゲットが設定されてきたが、たとえ個人レベルでよい資格をとったとしても、需要と供給のバランスが崩れているため、たとえ70万の学生が大学に入りたくても50万人の学生しか受け入れることができない。20万の学生は、資格がないのではなく、資格はあるが、空きがないので入れない。そうすると、学生はもっともっとよい成績をとらなければならないという個人レベルのプレッシャーを抱えていくことになる。そして、学校を終えても常にがんばり続けなければならない。これが、どのような影響を与えるのかが心配である。

舘林 奥さんのスーザンさんの方は、違うご意見をお持ちであると思う。スーザンさんは、全く やる気がない子どもが多いと言っていた。がんばってもがんばらなくても同じという気持ちがあ り、よい仕事に就きたいなどの気持ちがない。また十代の妊娠なども問題になっている。

宮島 そちらの方が重要な問題であると思う。

新井(浅) 城西大学のあらいです。1つめは、パーソナルチューターの話をされたが、ホーム チューターとの違いを確認したい。

モーガン 同じことを意味している。大事なことは、教員が 1 人 1 人の生徒のことをしっかり見つめているということである。

新井(浅) QCDA が廃止されるということであるが、なぜ突然廃止するのか、今後どうなるのかなどについて教えてください。

モーガン QCDA の廃止の理由について、一つ目は、現実問題として、QCDA は規模が大きくなりすぎてしまい、経費がかかりすぎるということである。もう一つは、理念的な面である。カリキュラムの開発やカリキュラムの内容が実際にうまく教えられているのかどうかについてのモニタリング機能については、これまで政府の外郭団体としてやってきたが、今後は政府の中に取り入れていく。なので、外にある組織としてはなくしてしまった。初等学校の最後に行う試験に対して政府は責任を負うことになるが、政府はこれを早く導入したいという気持ちが強いために、これがどのような効果をもたらすのか、失敗した時に誰が責任を負うのか等についてあまり考えていないように思う。

新井(浅) 中等学校については試験団体が行い、初等学校は政府が行うという理解でよいか。 モーガン それでよい。以前は、いくつか試験を作成する会社があって、どこの会社の試験問題 を選ぶかは教科の主任が決定していた。ところが、標準化されたものがなかったので、試験が易 しくなってしまうこともあった。その後、統一されるようになり、全国的な水準を保つことがで きるようになった。しかし、今回それがまたなくなってしまうことによって、どのような影響を 及ぼすのかについては懸念事項である。

志村 上越教育大学の志村です。シチズンシップ教育の性格は、政権交代によってどのようになりそうなのかという点が 1 点です。もう一つは、sustainable school strategy や education for sustainable development に関わる話がいくつも出ていたが、実際にはどのような教科を中心に行われているのか。

モーガン 毎日新しいアナウンスメントが発表されている段階なので、まだはっきりとしたことが言えないというのが現状である。ただし、カリキュラムの見直しが行われるのは確実である。

カリキュラムの見直しは行われたばかりであるのに、また行うのかと思う。しかし、政府はやは り自分たちの色を出していきたいために、カリキュラムの見直しを行うふりをするのではないか。 シチズンシップ教育が導入されたとき、これは教員が教えられるものなのかという疑問があり、 個人としては拒否してきた。しかし、私は学校の中で子どもたちが民主的な手続きを踏むしくみ を構築してきた。たとえば、子どもと大人を対等に置いたり、子どもの側から出てくる要望を実 現するしくみを作ったりした。具体的には、教員を雇用する際に、教員だけでなく生徒もインタ ビューに加わらせて、自分たちも力を行使できるのであるということを学ばせた。新政権になっ て今後どうなるかはわからないが、シチズンシップ教育は重要ではないのでやめるという方向に はならないと思う。しかし、そのシチズンシップ教育に割かれる時間は少し少なくなるのではな いか。中身に関してどういうことを教えるかについてのリストがあるが、それが変わっていくで あろうと思っている。学校の中で、子どもたちをコミュニティの一員として、国民として、グロ ーバル市民として育てていくことには今後も変わりはないであろう。それは、21世紀の教育を 考える上で重要であるからである。たとえば、スーザンの学校で懸賞があった。政治について自 分の意見を述べるというものであったが、生徒が政治について意見を持つことができたことは教 員にとっても大きな励みであり、シチズンシップ教育の一つの大きな成果であると思っている。 スーザン テレビの番組で、クエスチョンタイムというものがあるが、それをまねて子どもたち が地元の議員を招いて模擬クエスチョンタイムをすることがある。その時、子どもたちは議員に 対する質問を組み立てることができ、実際に質問でき、子どもたちが決定に関わることができる。 そして、子どもたちは議員とディベートできる。これは、1年に1回行われており、今までに6 回行われた。

小松 先ほどからの議論を聞いていて思ったことは、イギリスというのは、問題を発見して、それに対応する組織を作って、だんだん人も金も増えてきた頃に、廃止になる。ちょうどわれわれも、同じような経験をしつつある。たとえば、今日新聞に出ていた全国学力調査の問題もそうで、お互いに学ぶことがあるのではないか。現場の先生方の代表として、また時には政策に対峙される方として、現状をお話いただき、私がモーガンさんを招いた意図が少しは実現できたのではないかと思っている。最後に、ジョン・モーガンさんと奥様のスーザンさんに拍手をお願いします。